

深川芭蕉庵

ここ深川の芭蕉庵は、蕉風俳諧誕生の故地である。延宝八年（1680）冬、当時桃青と号していた芭蕉は、日本橋小田原町からこの地に移り住んだ。門人杉風所有の生簀の番小屋であったともいう。繁華な日本橋界隈に比べれば、深川はまだ開発途上の閑静な土地であった。

翌年春、門人李下の贈った芭蕉一株がよく繁茂して、やがて草庵の名となり、庵主自らの名となった。以降没年の元禄七年（1694）に至る十五年間に三次にわたる芭蕉庵が営まれたが、その位置はすべてほぼこの近くであった。その間、芭蕉は庵住と行脚の生活のくり返しの中で、新風を模索し完成して行くことになる。草庵からは遠く富士山が望まれ、浅草観音の大屋根が花の雲の間に浮かんで見えた。目の前の隅田川は三つ又と呼ばれる月見の名所で、大小の舟が往来した。それに因んで一時泊船堂とも号した。

第一次芭蕉には、芭蕉は延宝八年冬から、天和二年暮江戸大火災に類焼するまでのあしかけ三年をここに住み、貧寒孤独な生活の中で新風俳諧の模索に身を削った。

櫓の声波ヲ打つて腸氷ノ夜や涙

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

氷苦く僵鼠が咽をうるほせり

天和三年（一六八三）冬、友人素堂たちの好意で、五十三名の寄謝を得て、本番所、森田惣左衛門御屋敷の内に、第二次芭蕉庵が完成した。草庵の内部は、壁を丸く切りぬき砂利を敷き出山の釈迦像を安置し、へついが二つ、茶碗十個と菜刀一枚、米入れの瓢が台所の柱に掛けてあった。

『野矢らし紀行』鹿島詣「笈の小文」の旅はここから旅立った。

古池や蛙とびこむ水の音

名月や門に指し来る潮頭

川上とこの川下や月の友

秋に添うて行かばや末は小松川

芭蕉庵の所在地は、元禄十年松平遠江守の屋敷となり、翌十一年には、深川森下町長慶寺門前に、什物もそのまま移築されたよつである。

平成七年四月

江東区

（＊説明板より抜粋）